

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Possibilities of the Ethnography by the Postsoviet anthropologists : Media and tradition of Russian culture : The magic boom generation in contemporary Russia : The crossing of magic research and magic practice

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤原, 潤子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001254

現代ロシアにおける呪術ブームの生成

——呪術研究と呪術実践の交差点から——

藤原 潤子

国立民族学博物館外来研究員

ロシアではソ連崩壊後、マスメディアを用いて活動を行う呪術師(以下、マスメディア呪術師)が多数登場した。民族に伝えられてきた「伝統」であるとして彼らが発行する「実用呪術書」は、書店で大量に販売されており、さながら呪術ブームの様相を呈している。

ロシアの民族学・フォークロア研究者は19世紀以降、呪術にまつわる多くの資料を採集し研究を行ってきた。しかしその活動においては、社会主義革命期までのいわゆる「伝統」を再現することに主眼が置かれてきた。ポスト社会主義時代における新たな潮流については、研究者たちはほとんど無視するばかりでなく、「本物の伝統」を歪めるものであるとして攻撃的な態度さえ取ってきた。本稿はこのような研究上の空白を埋め、研究者の活動自体をも現代の呪術ブームの構成要素としてとらえなおそうとするものである。

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 はじめに | 4.1 「民族の遺産」という語り |
| 2 マスメディア呪術師への批判 | 4.2 フィールド調査を通じた意識転換 |
| 3 「伝統的」呪術師とマスメディア情報 | 4.3 マスメディア呪術師の誕生 |
| 3.1 事例1：ラリーサ | 5 循環する知識 |
| 3.2 事例2：アンナ | 5.1 呪術研究と呪術実践の交差点 |
| 3.3 事例3：ニーナ | 5.2 呪術研究者への非難と期待 |
| 4 呪術知識の大衆化 | 6 結論 |

*キーワード：ロシア、フォークロア、呪術、伝統、正統性、マスメディア

1 はじめに

現在のロシアにおいて、呪術¹⁾、呪文、呪いといった言葉は、ごく日常的に目に触れるものとなっている。無神論を標榜するソビエト政権に迫害され、息を潜めつつも主に村々で存在し続けたいわゆる「伝統的」な呪術師に加えて、1990年代初頭からマスメディアを通じて活躍する呪術師(以下、マスメディア呪術師)が次々と登場した。これにより、呪術ブームとでも呼んでよいような状況が生じている。現在、街のどの書店にも、『家庭の呪術』、『いかに邪視や呪いと闘うか』などと題した「実用呪術書」が常時何冊も並び、誰でも購入することができる²⁾。これらの本には、呪いを祓うため、病気を治すため、愛を取り戻すため、ビジネスで成功するためなど、様々な目的に応じた呪文が多数掲載

されており、必要に応じて人々に利用されている。マスメディア呪術師らは一般に、無神論政策によって消滅の危機に瀕する呪術の「伝統」を民衆の手に取り戻すために、自らに伝えられた呪術知識を印刷出版しているのだと主張している。このような現象は、ポスト社会主義各国で生じている伝統復興運動のひとつである。

1980年代の人類学及びフォークロア研究において、「伝統」概念が近代化を経た視点によって創出されたものであり、研究者自身もこれに深く関わってきたことが指摘されている³⁾。本稿はこの視点を共有しつつ、ポスト社会主義ロシアにおける呪術的「伝統」の創出を描くものである。民族文化の保存を目的とした過去及び現在の学術的記述が、いかに実践の文脈に置き換えられ、現在の呪術ブームを構成することとなったのかについて論じたい。

記述にあたっては書店で販売されている実用呪術書、及び2002～2004年に行ったフィールド調査資料を用いる。調査地はロシア連邦カレリア共和国（首都ペトロザヴォーツク（Petrozavodsk）とその周辺、プードシ（Pudozh）地区ヴォドロゼロ（Vodlozero）地域、ベロモルスク（Belomorsk））、アルハンゲリスク州オネガ（Onega）地区、ロシア第2の都市ペテルブルグである。調査の大部分は、カレリアの民族学者イリイチ（仮名）と共同で行った⁴⁾。本稿で用いる調査資料及び文献資料はすべて、エスニックな意味でのロシア人を扱ったものである。

2 マスメディア呪術師への批判

ロシアでマスメディア呪術師が登場したのは1990年代初め、検閲の廃止とソ連崩壊に伴ってのことである。彼らは「世代を通じて伝えられてきた知恵」、「ソビエト政権に破壊された伝統」を復活させようと呼びかけ、健康や幸せを守るために呪術知識が役に立つとして呪文を大量に印刷している。これらを利用する人々がいる一方で、彼らの活動はしばしば非難の対象ともなっている。「偽者よ!」、「ペテン師だ!」などと非難されるのである。

ロシアの民族学者やフォークロア研究者もやはり、マスメディア呪術師には批判的である。学術的に呪文のモチーフ分類研究を行っているV・クリャウスは、呪文関係文献のレビューにおいてN・I・ステパーノヴァ⁵⁾、Iu・ロンゴ、I・A・ヴァシリエヴァなどのマスメディア呪術師を名指しし、彼らの著書は「偽フォークロア書」と断罪している。クリャウスはこのような「出典不明」のテキストを含んだ呪文集がなだれをうって出版され買われている状況を憂え、フォークロア研究者の手によるきちんとした呪文集の出版を急ぐべきであると結んでいる（Kliaus 1999: 54）。研究者によってしかるべき方法で採取され、アーカイヴズに保存される、というような手続を経ない呪文はすべて、彼にとって偽物なのである。

ではなぜフォークロア研究者らは現在起こっている現象を研究対象とするのではなく、感情的に批判するのだろうか。それは以下に述べるような、ロシアにおける民族学・フォークロア研究のあり方と関わっている。ロシア語における「フォークロア」(fol'klor)という言葉は日本における用法とは異なり、昔話や民謡などの口頭伝承のみを指す。日本語で「フォークロア(民俗学)」と言った場合に含まれる風俗・習慣、物質文化、信仰などを対象とする研究領域は、ロシアでは「民族学」(etnografija または etnologija) と呼ばれる。呪術は呪文という口頭伝承に留まらず物質文化や信仰にも関わる現象なので、フォークロア研究者も民族学者も共に関わることになる。日本における民族学(文化人類学)が現代研究を主としているのに対し、ロシア民族学及びフォークロア研究は過去への志向、つまり失われかかっている文化の保存や失われた文化の再構築をめざす側面が強い。筆者は何度か現地の研究者と共同で調査を行ったが、村の古老を訪ねてかつての生活を思い出して語ってもらう、あるいは現在に残っている文化の中から「伝統的」と思われる要素を拾い上げるという方法が中心であった。

ではロシアの民族学・フォークロア研究者にとって、「伝統」とはいつの時代の文化を指すのだろうか。ロシアにおいてフィールド調査がさかんになったのは19世紀であり、この分野の資料として参照可能なのは概ねこの時期以降である。また20世紀初頭以降は社会主義政権による近代化政策により、「伝統文化」が徐々に失われていったという史観を彼らは持っている。そのためロシアの民族学・フォークロア研究者が「伝統」と言う場合に事実上想定しているのは、19世紀～20世紀初頭の文化である。後述するように、マスメディア呪術師の活動は、マスメディアを使った呪術知識の伝達方法その他の点において、研究者の持つ本質主義的な「伝統」観に反する。そのため、ロシアの研究者の多くにとって、マスメディア呪術師は単なる「偽物」にすぎず、それゆえ研究対象となりえないのである。

研究者たちが「偽物」を無視するだけでなく強く批判するのには、ポスト社会主義という時代性が関係している。ソ連時代、各種の学術分野は社会主義建設を目的とした政治的な啓蒙活動のために動員されたが、民族学やフォークロアも例外ではなかった。民族学研究者が調査地の共産党組織と共同で無神論プロパガンダを行ったり(Samarin 1931: 238)、フォークロア研究者がフォークロアの担い手と共同でソビエト政権を称えるフォークロア風の歌を作ったりする(Miller 1990)というような実践が各地で行われた。また研究者の会議では、社会主義にふさわしいフォークロア・ジャンルと死滅の運命にあるジャンルについての議論も交わされた(Sokolov 1931: 92-94)。科学的世界観を志向する労働者の国ソビエトにおいて、革命歌、労働歌などのフォークロアは発展させるべきものとされたのに対し、呪術は当然死滅の運命にあるものとみなされた。1930年頃からペレストロイカによって規制の緩む1980年代半ばまでの間、フィールドで採集された呪術資料の出版は事実上不可能であったが(Vinogradova 1994: 7 参照)、

それは社会主義体制下では存在するはずがないものだったからである。ソビエト体制崩壊以降は、学問は政治の道具であることをやめ、自由な研究活動が可能になった。現在それに伴い、多くのロシアの民族学・フォークロア研究者は、ソ連時代に生じた研究上の空白を埋めること、ソ連時代に破壊された「伝統」を次世代に伝えていくことを使命感として持っている。そんな彼らにとって、マスメディア呪術師は「本物の伝統」を攪乱させる者に他ならないのである。

ロシアの研究者たちの「伝統」への固執はポスト社会主義という時代性のみならず、神話研究の文脈とも関連している。民族学・フォークロア研究者の採集した資料はどれも、ある時期のある地域における文化の記録である。しかし実際には単にそのようなものとしてのみ扱われるのではなく、ロシア民族文化の「祖型」を描くための材料、ロシア人を含むスラヴ人の神話世界を再構築するための材料としての眼差しも注がれてきた（坂内 1985: 23; 1995: 311参照）。スラヴ民族にはギリシャ神話などのような豊かな神話資料は残されていない。比較的古い時代に由来する資料としては、年代記などの中世文学における断片的な記述と考古学的な資料などに限られる。ロシアにおけるフォークロア・民族学資料は、スラヴ神話のこのような資料的な欠落を補うものであり、いわば神話の断片とみなされている。様々なジャンルの資料の中でも、呪術に関するものはとりわけ古層文化に属するものとされ、スラヴの神話的世界観の再構築のために利用されてきた⁶⁾。このような研究背景からも、研究者のマスメディア呪術師への反発を理解することができる。過去へと遡ろうとする者にとって、マスメディア呪術師の帯びる現代的な要素は排除すべきものでしかないのである。

しかし文化とは不変なものではなく変化し続けるものであり、ロシアの呪術に関しても同様である。イギリスのスラヴ文献学者 W・ライアンがその著書で示したように、すでにロシアの「伝統」となっている呪文も呪術儀礼も、周辺の諸文化との交流の中で歴史的に構築されてきたものであった（Ryan 1999）。だとすれば、マスメディア呪術師の出現という現代的な現象もやはり、ロシアにおける呪術文化の歴史の一部をなすものとして研究対象とすべきだろう。そのため、本稿においてはいわゆる「本物の伝統」の探求は行わない。「伝統」は特定の時代的・政治的欲求によって創造されるものである（ホブズボウム・レンジャー 1992）という観点に立ち、現代における呪術の新しい「伝統」の生成に焦点をあてる。その際、ロシアの研究者の活動や「伝統性」をめぐる研究者たちの言説そのものも、現代ロシアにおける呪術信仰の一側面を担うものとして考察対象としたい。

3 「伝統的」呪術師とマスメディア情報

呪術知識についてはこれまで多くの民族学者によって、基本的に秘められたものとし

て記述されてきた。知識は1人、または数人の子孫または親しい人へのみに、何らかの儀礼を経て呪術師から直接相続されるものであった。呪文はしばしば、他人に話すと力が失われると考えられた。そのため研究者にとって、呪文は非常に採集困難なジャンルであった（Kurets 2000: 3）。このような「伝統」は現在でも完全には消えていない。2002～2004年の調査においても、呪術を現に実践している呪術師たちは、必ずしも我々に呪文を教えたがらなかった。多数の呪文が一度に採集できたのは、呪術師が誰にも呪術知識を「相続」せずに死に、呪文が書き付けられたノートが子孫の手元に残った場合であった。相続儀礼をせずに残された呪文はすでに力が失われていると解釈されるため、コピーが許されるのである。

このような「伝統」と対比すると、呪文テキスト自体は類似しているとはいえ、マスメディアで大量印刷された呪文は「効かない」はずである。しかし実用呪術書には、本を読んで開示された呪術知識を学べば誰でも「本物の呪術師」になれると書かれており、実際、多くの人々がこれらの呪文を利用している。そして「役に立つ言葉を印刷してくれた」、「ソビエト政府に破壊された伝統を取り戻してくれた」と言ってマスメディア呪術師に感謝するのである。

では研究者も認めるいわゆる「伝統的」な呪術師たちは、このような印刷出版された呪文をどう扱っているのだろうか。この点を考えるにあたって、以下に2002年の調査で出会った3人の呪術師を紹介する。彼らは共に先達から相続された呪文を所有する「伝統的」呪術師である。筆者はインタビューの際、マスメディアで印刷されている呪文について特に質問したわけではない。話の流れから偶然話題になっただけである。そのため、どの程度の呪術師によって印刷物が利用されているかについては、今後の調査が必要である。事例ではプライバシー保護の観点から、名前はすべて仮名である。また、詳しい居住地も記載しない。

3.1 事例1：ラリーサ（1920年生まれ、82歳、女性、年金生活者、元コルホーズ員）

カレリア共和国の湖のほとりにあるA村に住むラリーサは、村一番の呪術師である。ある若い母親によると、子どもが生まれると皆、彼女のところに行き、病気にかからないように呪文を唱えてもらう。

ラリーサは母親から呪術を学んだ。母親が年をとってから徐々に、である。母親が口頭で呪文を言い、ラリーサがそれを記憶した。ラリーサは、母親の他に数人の知り合いからも呪文をいくつかもらっている。ラリーサによると、呪文の力は口頭で伝わる。母親から聞いた呪文を書き留めることはしなかった。

ラリーサはもう年なので、娘のひとり（1955年生まれ、教師、カレリアの首都ペトロザヴォーツク在住）に呪文を相続した。娘は覚えられないと言ったので、ラリーサが

口頭で呪文を言い、娘がノートに書き留めた。ラリーサによると、呪文は3人に相続することができる。例えば娘ともうひとりの娘と息子に。もし4人目に言ってしまうと、呪文の力は失われる。言葉を知っていても効力を持たなくなるのである。

ラリーサは我々に様々な呪文を言った。腫れ物治療の呪文、血止めの呪文、るいれき（頸部リンパ節結核）治療の呪文、家畜の邪視除けの呪文、家を建てる時の言葉、新しい家に入る時の言葉、湖を渡って家畜を運ぶ時の呪文、溺死者を見つけてくれるよう水の主に頼む呪文、風呂小屋で子どもを洗う時の言葉、歯痛治療の呪文、腰痛治療の呪文、ひきつけ治療の呪文などである。これらは我々の許では効力を発しないものとして話してくれた。

インタビューのお礼として共同調査者イリイチが、「自分がフィールドで採集した呪文がよく効くから教えよう」と言った。それに対してラリーサは、「呪文が効いたということは言うてはいけない、また他人に呪文を言ってもいけない。あなたの呪文だから誰にも渡さないように」と言った。

ラリーサによると、呪文は「口から口へ」伝えられた時に力を持つ。こう述べた後、「でも今では印刷されて本になっている呪文が効くとか言われてますがね」と付け加えた。ラリーサは市場で売られている実用呪術書を読んだことがあるという。このような本についてどう思うかを尋ねたところ、「馬鹿馬鹿しい」という返答だった。

ところがラリーサは隣に住む意地悪な姪がマスメディア呪術師の著書を3冊所有していることについて、非難をこめて語った。「そこには呪いのかけ方が書いてあるんだよ」と言った。そして姪が呪術書を用いて自分に様々な嫌がらせ——呪文を唱えながら結び目を作ったり、針を敷居のそばに置いたりすることによる呪い——^{のろ}をすることを語り、憤慨した。ラリーサによると、印刷された呪術書が効くかどうかは、誰の手を経てきたかによる。そして、「このような呪術書を使っても確なことはない、悪事に用いれば、その報いは本人に返っていくのだから」と語った。

3.2 事例2：アンナ（1961年生まれ、41歳、女性、主婦）

アンナもラリーサと同じく、カレリア共和国のA村に住む。学歴は専門学校卒で、専攻は獣医学である。現在は主婦で、自宅には牛を飼っている。アンナによると、呪文は一番下の子どもが16歳になるまでは誰にも相続できない。また呪文は自分より年下の者2人に相続しなければならず、うち1人は血縁者、もうひとりとは他人でなければならないという。

アンナによると、A村と同じ地区にあるB村にとってもよく呪術を知っている老人がいる。彼はノートいっぱいの知識を持っており、アンナはそれを書き写させてもらった。老人はどうすれば湖を怖がらずに渡ることができるか、どうすれば波を恐れずにすむのかなど、すべてを話してくれたという。また最近亡くなった隣人の老女もよく呪術を知っ

ている人で、アンナは長時間かけて様々なことを教わった。

アンナは以前、呪術など信じていなかった。「そういう時代だったから」と説明する。しかし年上の知り合いが多いため、興味を持つようになった。興味を持ち始めてからは、新聞などのマスメディアに掲載された呪文も書き写すようになったという。

アンナは我々に、生まれた子牛を家に「据える」呪文、新しい家に入る時の言葉、風呂に入る時の言葉、牛の乳の出を良くする呪文、重い病人に死か回復かいずれかの結果が早く出るようにする言葉、死人が通って来ないようにする言葉、不眠祓いの呪文、アルコール中毒治療の呪文、夫が妻を殴らないようにする呪文、腰痛治療の呪文、血止めの呪文、できもの治療の呪文、愛させるための呪文、豊漁の呪文、風をおさめる呪文、邪視除けの呪文、憂鬱な気分を取り去る呪文、森の主に牛を返してもらおう呪文、子どもを洗う時の言葉、別のところに連れて行かれた家畜が元の家に帰りがらないようにする呪文について話してくれた。しかし、呪文のテキストを完全に覚えているわけではなかった。すべては別宅にあるノートに書かれているとのことである。かなりの呪文を教えてくれたが、男性の精力を奪う呪文は頼んでも決して明かさなかった。それは秘密の知識だと言った。他にも話すことのできない秘密の知識があるとのことである。

アンナによると呪文や呪術行為というのは、ある時に誰かが考え出したものである。唱えた呪文や呪術行為が効いた場合、それを覚えておいたのだろうと述べた。インタビューの際、彼女の娘が3人（幼児～20代）同席していたが、彼女らも恋の呪術などを実践していると話した。

我々は、別宅にある彼女の呪文ノートをコピーさせてくれるよう頼んだ。ノートには先述の老人から書き写させてもらったものの他、いろいろな人から教わった呪文があるという。後日、別宅を訪れた際、アンナはノートを撮影させてくれたが、許可されたのはノートの前半のみであった。我々が後半の呪文を見ることがないように、撮影中、彼女は注意深く私の横に立っていた。撮影できた呪文は計31ページ、36編である。このノートには言葉を伴わない呪術的儀礼や予兆、民間暦、葉草についても記されていた。

日本に帰国してからノートのコピーを見直した際、その中の呪文のひとつ、「ゴキブリ・ネズミ退治の呪文」の唱え方についての説明の一部に、次のような箇所があるのに気付いた。「・・・の蓋をしっかりと閉じ、朝4～6時の間の私とのコンタクトの時間に入気の無い場所に出て・・・」。この呪文は間違いなく、定期的に自身と呪術的コンタクトを取ることを勧めるマスメディア呪術師の印刷物からの抜き書きである。コピーを読み進めるうちにさらに、多くの呪文に番号がふられていること、一部の番号が脱落したり繰り返されたりしていることに気付いた。新聞や書籍に数編～数百編の呪文が1度に掲載される場合、順に番号がふられることが多い。ここから、撮影した呪文のうちの少なくとも一部は印刷物から書き写したものであること、数字の脱落はアンナが自分には不要と思われる呪文を飛ばして書き写した結果であり、重複は異なる情報源から書き写し

た結果であることが推測できた。アンナが呪文ノートの前半後半をはっきり区別し、後半は決して見せようとしなかったことを考えると、彼女はおそらく印刷物から書き写した呪文のみを我々に見せ、個人的に相続された呪文は見せなかったのである。

ノートを撮影した際、私の共同調査者がアンナに、別の地域の調査で採集した呪文十数編を後日お礼として送ることを申し出た。彼女はそれを聞いて喜んだ。しかし彼は多忙のため、アンナに呪文を送るのを忘れてしまった。1年後、我々が再び村を訪れた際、アンナには会えなかったが、約束が守られなかったと彼女が不満を漏らしていたことを、その夫から聞いた。

3.3 事例3：ニーナ（1950年生まれ、52歳、女性、年金生活者）

ニーナはアルハンゲリスク州の小都市Dに住んでいる。彼女はヴォログダ州生まれだが、1967年に仕事の関係で現在住んでいる地区に越してきた。その後19歳で結婚し、しばらくの間、夫の両親と同居した。ニーナには3人の子がいるが、夫との結婚生活は不幸なものだったらしい。夫が溺死するまでの間、31年間の結婚生活でキスをしたのは結婚式の時のみだったという。

ニーナによると、彼女は自らの意思で嫁いだのではなかった。働き者のニーナは未来の姑に見込まれ、呪術をかけられて夫と結婚するよう仕向けられた。ニーナは後になって姑の友人からこの「事実」を聞いたと言う。村では皆、姑が呪術師であることを知っていた。ニーナによると、姑は別の呪術師とふたりで村人の半分を離婚させ、別の人と結婚させた。姑自身、他の女性の夫を奪って結婚している。ニーナは夫と別れたいと思っていたが、それはかなわなかった。ニーナが隣家に住む親戚から聞いたところによると、姑はニーナと夫を結びつけ、決して離れることができないように、ニーナの傍で靴下を編んだ。姑の呪術知識はその母親から相続したものであろうとニーナは推測している。

ニーナと姑は仲が悪かった。しかしニーナが最初の子を産んだ時、姑は彼女にヘルニア治療の呪文や皮膚病治療の呪文、邪視除けの呪文を覚えるよう言ったという。ニーナは当初、呪文に何の興味も持っていなかったが、姑は彼女に書き留めるよう言った。ニーナはなぜ姑が娘でも他の嫁にでもなく不仲の自分に呪文を相続したのか、未だに分らないと言う。姑から伝えられた知識のおかげで、ニーナの息子はチェチェンで兵役に就いた時も無事帰還した。ニーナは姑の他、舅や同じ村に住んでいた老女ナージャからも呪文を相続している。ナージャは死の直前にニーナに呪文ノートを与えることによって呪術を相続した。ニーナの推測によると舅は自らの姉妹から、ナージャは村人の誰かから知識を相続している。

最近ニーナの息子の嫁が女の子を出産したが、この子は病気がちである。そのためニーナは嫁に呪文を利用するよう勧めた。嫁はすべての呪文を書き写した。ニーナは、自分の家の近所の人には呪文を知っていることを隠していると言う。なぜなら、もし彼女が

呪文で誰かを助けたりしたら、人々に邪悪な呪術師の嫌疑をかけられるかもしれないからである。

今ではもうニーナは呪文を唱えられない。歯をすべて失ってしまったからだと言う。ニーナは我々に、「すべての呪文をあなた方に教えてもいいが、これらはもう効力を持たない」と言った。彼女は自らの呪文ノート2冊のすべてを撮影させてくれた。ノートには姑、舅、老女ナージャから相続した呪文の他に、ブルガリアの著名な呪術師ヴァンガの呪文もあった。これはニーナの娘が印刷物から書き写したものである。娘がヴァンガの呪文を書き写そうとした時、ニーナは他の呪文と見分けがつくように違う色のペンで書くよう言った。娘は赤ボールペンで書き写した。

ノートに書かれている呪文のひとつに、火傷治療の呪文ある。この呪文の末尾には、1998年発行の新聞『ダーチナヤ』からの転記であることが記されている。『ダーチナヤ』とは口コミ情報が交換される掲示板形式の新聞で、紙上では呪文についての情報もしばしば掲載されている。ニーナの呪文ノートは、ニーナとその娘と老女ナージャの3種類の筆跡で書かれているが、筆跡から見て『ダーチナヤ』紙から転記したのは老女ナージャである。2冊のノートには、ヴァンガの呪文を除いて計37編の呪文が記されている（ヴァンガの呪文は不注意により撮影し忘れた）。呪文は主に、治療の呪文と家畜の飼育のための呪文である。ニーナによると、家畜の呪文は舅から相続したものである。呪文以外に民間療法についての記載もいくつか見られた。

ここまで研究者も「伝統的」とであると認めうる3人の呪術師を見てきた。彼女らの大量印刷された呪文に対する態度は、以下のとおりである。事例1のラリーサは呪文の力は口頭で伝わるとし、印刷された呪術書など「馬鹿馬鹿しい」と言っている。その一方で、隣家に住む意地悪な姪が呪術書を持っているという事実に対して恐怖を感じている。つまり、ラリーサは印刷された呪文の効力を完全には否定していない。事例2のアンナは、相続された呪文も印刷物から書き写した呪文も同じように効力を持つと考えている。また自らの実践のために研究者が採集した呪文を使っても良いと考えている。事例3のニーナも、大量に印刷されているヴァンガの呪文を書き写すことに抵抗を感じていない。ニーナのノートから察するに、彼女に呪文を相続した老女ナージャもマスメディアで印刷された呪文を一部使用していた。このように、秘密の知識を相続している「伝統的」呪術師らさえ、多かれ少なかれ印刷された呪文の効力を認めているのである。

4 呪術知識の大衆化

4.1 「民族の遺産」という語り

上記に挙げた3人の呪術師にとって、親族や知人などから相続された呪文は個人的な

所有物であり、誰にでも与えることができるようなものではない。定められた人数以上の人に話したりすると効力が失われると信じられている。では、マスメディア呪術師が印刷する誰が唱えても効くという呪文は誰のものなのだろうか。

現在ロシアで最も有名なマスメディア呪術師の1人として、フォークロア研究者クリヤウスが「偽フォークロア書」の著者として名指したステパーノヴァを挙げることができる。彼女は1990年から現在までに計100冊以上の著書を出版している⁷⁾。中でも『シベリアの呪術師の呪文』シリーズは有名で、2007年現在23巻まで発行されている。ステパーノヴァにはロシア各地の読者から寄せられる様々な相談の手紙に対して、紙上で解決のための呪文を教えている。村及び都市部で出会った我々のインフォーマントの中にも、ステパーノヴァの呪文集を所持し実践に使っている者が何人もいた。

ステパーノヴァは著書の中で、自分の呪術知識は祖母から相続されたものであると語っている (Stepanova 1996: 83)。では、祖母から個人的に相続されたステパーノヴァ個人の知識が読者の知識になったと考えて良いのだろうか。一見あたかもそのように見える。しかし実際はその間に、もう一段階別のプロセスが存在する。以下は編集部によってステパーノヴァの著書の表紙裏に書かれた言葉である。

傑出したロシアの呪術師の手による本書は、生活のあらゆる場面に役立ちます。世紀を超えて伝えられてきた我々の祖先の知恵を利用しましょう。あなたの力で自分自身と身近な人、あなたの愛が守れるようになります。病気、不幸、裏切り、背信から家庭を守れるのです (Stepanova 1996: 2)。

ステパーノヴァ個人の呪文が、実に自然に別の文脈に置き換えられている。この本に掲載されているのは彼女の個人的な知識などではなく「我々の祖先の知恵」、つまり「我々ロシア民族の知識」なのだ。そしてこの遺産について知り利用する権利がすべてのロシア人にあることが示されている。民族の知識ならば、もはやステパーノヴァひとりが独占することは許されない。呪文はソ連崩壊後の困難な時代において、助け合い精神の下、万人に分け与えられるべきものとみなされるのである。このような呪文の所有者の変換により、秘密の知識は誰にとっても接近可能なものとなった。そして個人の知識でなく「我々の知識」だからこそ、誰が唱えても効くという解釈がもっともらしく聞こえるのである

これにより、誰もが安い値段で呪文を買うことができるようになった。では、大量販売に都合の良いこの変換を行ったのは誰だろうか。フォークロアで大儲けを企む人びとだろうか。もちろん彼らもそのひとりである。しかし、より重要な役割を果たしたのは、実はフォークロア・民族学研究者だったのではないだろうか。次章ではロシアの呪術研究というコンテキストにおいて、調査者がインフォーマントに与えてきた影響について見ていきたい。

4.2 フィールド調査を通じた意識転換

以下は1996年にフォークロア研究雑誌に掲載されたフィールドノートからの抜粋である。ロシアのフォークロア研究者である「私」がボレーシエ地方（ウクライナとベラルーシにまたがる地域）の呪術師ガーパと交わした会話が記されている。調査目的でガーパの許を訪れた研究者に対し、ガーパがこう言うところから始まる（下線及び〔 〕内の説明は藤原による）。

「愛する人とくっつけるのも引き離すのも血止めも、何でもできるよ。10ルーブル！」

…ガーパはまた言いました。

「10ルーブル！ リーパ [おそらく村人の一人] だって10ルーブル払って必要な言葉を書き写したんだ」。

私は少々厳かに、同時に咎めるような口調でこう尋ねました。

「リーパは何のために書き写したんですか？」

「何のためだって？ 自分のために決まってるじゃないか」

「私は自分のためなんかじゃありません。人々の手に残るように、すべてが忘れ去られてしまわないためなんです。私は何も得ませんが、あなたには名誉なことですよ。それなのに10ルーブル出せだなんて！」

ガーパは当惑したような顔をしました。しかし「仕方ない」と言って、無料で愛の呪文をひとつ教えてくれました (Nikitina 1996: 53)。

この会話には、調査者側の典型的な思考の枠組みが映し出されている。研究者は村に入り、科学のために必要なんだと言いながら老人らを説得し、歌を歌わせ昔話を語らせる (Grigor'eva 2000: 40)。筆者自身、現地の研究者に同行した時に見聞きしたことだが、彼らはロシア科学アカデミーに属する者であると名乗った上で、村の老人から聞き取った話を国立フォークロアセンターの雑誌に写真入りで紹介する、「ロシアのフォークロア的記念碑」といったシリーズに入れる、あるいは大学の文書館に永久保存することを述べる。そしてそれは「非常に名誉なことだ」、「あなたは歴史の一部になるのだ」と悦ばしげに語る。文化保存の奉仕者を自認する研究者側の枠組みにおいて、インフォーマントの情報はロシアあるいはスラヴ民族という「創造の共同体」(アンダーソン 1987) の文化遺産の一部である。研究者に情報提供することは、学術的に再構成される民族文化の有機的な構成素となることであり、それゆえにインフォーマントにとって非常に名誉なことであると調査者は考えている。ところが上の記述にあるように、ガーパは困惑している。なぜなら彼女にとって呪文は10ルーブルで販売可能な個人的所有物であり、「民族の遺産」であるというような意識はもっていない。しかし彼女は研究者側の論理に説得される形で、無料で呪文を教えるのである。

村の老人たちはこのようにして、ある日突然やってくる研究者によって民族文化の担い手に仕立て上げられる。研究者に権威付けされることによって、インフォーマントの

中でその知識が占めていた位置は全く別のものとなる。「私の」知識から「我々の民族の」知識へと変化させられるのである。ここで起こっているプロセスは意識改革以外の何物でもない。「伝統」を保存するために「伝統」を集めている研究者自身が、「伝統」の存在形式を急激に変更しているのである。ロシア各地の文書館には、19世紀から今日までにこうして収集された膨大な量の資料が保管されている。

では自らの知識が「民族の文化」であることを知ったとたん、インフォーマントの内部では何が起こるのだろうか。若いフォークロア研究者A・ブエノクが自らの論文で、フィールドでの生き生きとした印象と彼女自身のとまどいを交えて、面白い言葉を記している。秘密の呪文をブエノクに教えるべきか否かと考えながら自問する呪術師の言葉である。

これはあんたの科学研究に役立ててもらった方がいいのかもしれない。私に何の役に立つんだろう？ 何の用があるってんだろう？ (Buenok 1998: 17-18)。

個人のものであった呪術知識が「民族の遺産」であることが告げられ、それを記録させて欲しいと頼まれた途端、インフォーマントの葛藤が始まる。それは本来、ごく少数の相続者以外の誰にも開示してはいけない秘密の知識である。しかし、それをこれまで通り個人の知識として保持し続けるべきなのか、「民族の遺産」の保存という崇高な目的のために研究者に差し出すべきなのか。ブエノクの採集した呪術師の言葉は、見事にこの揺れを言い表している。人の良い呪術師が祖国の科学の発展のために知識を差し出すことはありうる。それに対して研究者は、「呪術知識の俗化現象が起こっている」と言うのである。それを招いたのが自分自身であることに気付きもせずに。

4.3 マスメディア呪術師の誕生

一般にフォークロアという学問はその発生において、ナショナリズムやロマンチズムと深く結びついている。ロシア・ナショナリズム思想の誕生と発展に豊かな靈感を吹き込んだのは、ドイツの歴史哲学者ヨハン・ヘルダーであった(廣岡 2000: 32)。彼は『人類の歴史哲学考』において、諸民族はそれぞれ1つの精神と1つの肉体を具現した1つの個体であり、その「個性」はそれぞれの民族の歴史、文学、宗教、芸術、慣習、言語のうちに表現されると主張した。19世紀、これに呼応したインテリの中から、民衆文化にロマンチズムを求めてフォークロアを集める者が現れた。北ロシアへ向かったP・N・ルイブニコフ、A・F・ギルフェルディング、N・E・オンチュコフなどである。一方で、当時の人口の大部分を占めていたロシアの農民たちにとって、ネイションはまだ意味を持たなかった(Hirsch 1997参照)。

18世紀末から19世紀に発明されたナショナリズムは、その後徐々に浸透していった。

民族学・フォークロア研究者もその流れを促進した者のひとりである。彼らは各地の村を踏破しつつ、フィールド実践を通して村の老人たちを民族文化の担い手に仕立て上げた。また採集した資料を民族文化の集大成として編纂・出版することを通して、自らが心に描いた「ロシア民族の伝統文化」を大衆の間に徐々に構築していったのである。

ロシアで現代と直接つながる伝統回帰的ナショナリズムが生じたのは、1960年代後半のことである。それはフルシチョフの非スターリン化政策の結果生じた、ソビエト・イデオロギー危機に対する1つの応答であった(廣岡 2000: 166-167)。これは19世紀とは異なり、大衆的なものに発展した。人々は歴史的連続性を求め、すでに構築されていた「伝統文化」のイメージの中に自らのアイデンティティーを探そうとした。その過程でフォークロアへの興味が高まったが、当時は呪術のような「迷信」は撲滅の対象であったため、公の場では実用の文脈で語られることはなかった。

その後、ペレストロイカを経て検閲が廃止されると同時に呪術に対する需要に応えたのが、ステパーノヴァをはじめとするマスメディア呪術師である。呪術を「我々祖先の知識」とする枠組みを実践の文脈に読み替え、マスメディアを利用して多くの同胞が共有できるようにしたのである。そしてそれは社会的苦難という状況とあいまって、多くの人々に活用されるようになった。マスメディア呪術師にとって呪術は実用知識であり、研究者にとってはそうではないという違いはあるものの、呪術を「ロシアの伝統」、「民族の遺産」とし、人々に伝えられるべき「失われた伝統」とする視点においては、両者は一致する。こうしてみるとマスメディア呪術師は、研究者による調査実践のいわば「鬼子」であるといえる。インテリである民族学・フォークロア研究者の行ってきた意識改革に対して、マスメディア呪術師は「民族の知恵」として実用呪術書を出版するという形で応えたのである。

マスメディアにおいて活躍する呪術師が「偽物」と言われやすいのは、マスメディアという媒体の新しさにも起因しているように思われる。しかし、これはマスメディア時代の到来に伴って、フォークロアがしかるべき適応を遂げたにすぎない。人々は困ったことがあれば、まず自分の村の呪術師のところに相談に行く。解決できなければ隣村の呪術師の所へ、それでも駄目なら地区一番または州一番の呪術師のところへ行く。マスメディア呪術師はこの自然な延長線上にいる。不幸を抱えて相談する人々にとって、村の呪術師もマスメディア呪術師もさしたる区別はない。重要なのは「効く」か「効かない」かである。

マスメディア呪術師の出版する呪文集が「偽フォークロア書」である、すなわちフォークロアではなく個人的著作であるという指摘は、ある意味で正しい。しかし例えばステパーノヴァの呪文は多くの人によって、効果を持つ「本物」の呪文として扱われている。このような印刷物はフィールド調査で明らかになったように、いわゆる「伝統的」な呪術師にも利用されている。確かに出版の時点では、彼らの著作はフォークロアとは言え

ないかもしれない。しかし多くの人がそれを「本物」とみなし利用する状況の中で、フォークロア化のプロセスは確かに観察できるのである。

5 循環する知識

5.1 呪術研究と呪術実践の交差点

マスメディア呪術師が民族学・フォークロア研究者から受け取ったのは、呪術を「民族の遺産」とする枠組みだけではなかった。研究資料として収集された呪文そのものも、様々な形で利用されている。呪術研究と呪術実践の交差点を象徴的に示す書物の一例として、A. アレクサンドロフ編『ロシア民衆の777の呪文とまじない（以下、『777の呪文』）』（Aleksandrov 1997）を挙げたい。

『777の呪文』は一見、研究書風である。目的別に多数のバリエーションの呪文が収められており、例えば血止めの呪文だけでも95編にも上る。呪文のテキスト以外に、呪文のモチーフについての解説や他の国の呪文との比較研究論文も掲載されている。呪文テキストには各所に注が付されており、巻末には特殊語の解説と出典一覧もある。50以上ある出典のほとんどは、学術的な目的でI・サハロフ（Sakharov 1985）、L・マイコフ（Maikov 1869）、N・ヴィノグラードフ（Vinogradov 1907; 1908; 1909）、M・ザビリン（Zabylin 1990）、G・ポポフ（Popov 1903）などによって革命前に出版された資料である。その他、ロシアの『金枝篇』と呼ばれるA・アフアナシエフ著『スラヴ人の詩的自然観』（Afanas'ev 1995）、ロシア人なら誰もが知っているV・ダーリの『現用大ロシア語詳解辞書』（Dal' 1994）、呪文の形態やモチーフの研究の集大成であるN・ポズナンスキー著『呪文』（Poznanskii 1995）なども使われている。民族学・フォークロア研究誌に掲載された論文・資料からの転載も多い。『777の呪文』は学術的なフォークロア選集の体裁を装おうとしているようである。巻末に出典一覧があるのみで個々の呪文の出典が明示されていない点を除けば、この装いにはかなり成功しているといって良いだろう。編者がある程度の民族学・フォークロア研究の知識を持っていることがうかがわれる。ところが裏表紙にはこのような宣伝文句が印刷されている。

この呪文・まじない集は、これまでで最も完全なものと言えるでしょう・・・本書は読者の皆さんに、この方面におけるロシア民族の壮大な精神的遺産を紹介するものであると同時に、呪文を治療行為に利用するすべての方のための、無類の実践的手引書でもあるのです（Aleksandrov 1997）。

この本の前書きには、「呪文には大きな力があります。だから注意して使用しなければいけません」（Aleksandrov 1997: 3）という言葉もあり、明らかに実用志向を持っ

ている。ではなぜ、研究書風の体裁を装わなければならなかったのだろうか。なぜならこれらの呪文が、「伝統」が破壊される以前に研究者によって「本物の呪術師」から集められた資料であることを示すことにより、その「効力」を保証しようとしている——こう読み込むことができるのである。

呪術はそれを信じるか信じないかという面からの議論を引き起こすという意味で、フォークロアの中でも、特殊な位置を占めている。例えば、「主人公が狼に乗って遠い国に行き、火の鳥と金のたてがみの馬と美しい王女を手に入れた後、兄弟によって切り刻まれて殺されたが、命の水をかけられて生き返った」というような内容の昔話を読んで、自分もやってみようと思う人はいない。昔話は単なるおとぎ話として読まれる。ところが、「呪いをかけるためには、墓から土を取り、相手の家の玄関に置く」というような呪術についての調査記録は異なる。もちろん研究者の意図通り、この行為を行うと呪いになると信じられていると読む者もいる。しかしこの記述は、「民族の知識を学びましょう」というマスメディア呪術師によって、いとも簡単に実用の文脈に移殖されてしまう。研究者が記述しているのはそう信じられているという社会的事実なのだが、マスメディア呪術師によってあたかもそれが自然科学的な意味での事実であるかのように読み替えられてしまうのである。その結果、これを読んで実際に墓から土を取り、気に入らない相手の家の前に置く者がいる。「現在の不幸は、もしかして誰かに墓土を置かれたせいではないか」と考えはじめる者もいる。あるいはいつの日か、玄関に一握りの土が置かれているのを見て驚愕する者もいるかもしれない。研究目的で行われた記述は、こうして否応なく実用の文脈に巻き込まれていくのである。

研究が実用の文脈に置き換えられている例は、『777の呪文』以外にも多数の実用呪術書に見出せる。結び目を使ったお守りの使用を勧める本においても (Krasnov 2003)、呪いが血を通じて一族に伝えられていくメカニズムを解説する本においても (Bednenko 2004)、巻末には研究書が出典として記されている。民族学・フォークロア研究者の手による学術資料は「伝統」の権威を持つがゆえに「本物」であり、すなわち「効力を持つ」という認識図式が見えるのである。

実用文脈で引用される研究書には、原典中では呪術を否定しているものが少なくない (Zabylin 1990: II; Sakharov 1885: 78 など)。とりわけ医師であったG・ポポフによる『ロシアの民間医療』は、医療の近代化を妨げる「迷信」を撲滅するために書かれたものであり、彼は文中で村の呪術師を何度もベテン師呼ばわりしている (Popov 1903: 60, 64, 82など)。これらが元の文脈から切り離され、実用知識として現代に蘇ったのは皮肉なことである。

呪術についての研究資料は呪文の「効力」を権威付けるために明示されるのみならず、密かに参照されることもある。先述のマスメディア呪術師ステパーノヴァは自らの知識について、祖母から相続されたものであるとしている。しかし彼女の呪文集には、実は

I・サハロフ (Sakharov 1885), N・ノヴォンベルグスキー (Novonbergskii 1907) などの古典的な呪術研究資料からの借用があることが指摘されている (Chernetsov 2004: 56)。彼女は革命前の研究資料を適宜参照して出典を記さずに転載したり, その形式をまねて新しい呪文を創作することによって, 「伝統」らしさを醸そうとしているのである。

5.2 呪術研究者への非難と期待

呪術研究資料が実用レベルに流用され, はからずも呪術ブームの一端を担うことになったことにより, 研究者がモラルを問われるという事態が起きている。民間におけるキリスト教実践についての研究をしている女性民族学者が, こんな話をしてくれた。

教会の司祭さまがね, 「あなたには悪魔が憑いてる」って言うのよ。「私は心から神を信じています」って言うんだけど, でもやっぱり, 「あなたには絶対悪魔が憑いている」って言うのよ。どうしてだかさっぱり訳が分からなくて……。それで, しばらくしゃべってるうちに, 私が民族学研究をしてるって話になったのね。そしたら, 「民族学は悪魔の学問だ。神を信じるなら, 研究はやめるべきだ」って。でも, 私は民族学が好きだし, どうしていいかわからないのよ。

呪術は罪であるとするロシア正教会の公式レベルでの見解に従うこの司祭にとって, 呪術を研究することも, 呪術研究という分野を擁する民族学研究さえも罪である。敬虔な正教徒であり, 研究の傍ら, ソ連時代に破壊された教会の復興運動にも取り組んでいるこの民族学者は, 司祭の言葉に悩んでいた。

これに似た非難は教会関係者からのみならず, 時に民族学者自身によっても発せられる。ペテルブルグの民族学研究所で呪術研究をしている女性は, 同じセクションで働く上司のことをこぼしていた。「呪術を研究するなんて, あんたは良い死に方しないよ」と嫌味を言われるのだという。

現代ロシアで呪術研究を行うこと——それは, 必然的に実践レベルでの呪術の言説に巻き込まれてしまうことであり, 筆者の身の上にも常に起こっている。「呪術師のところへ行って調査してきた」とロシアで友人や知人に話すたびに, 「で, その人は本物の?」と尋ねられ, 返答に窮す。何か問題をかかえている人は, 筆者が調査を通して多くの呪術師を知っていることを知るや否や, 自分の悩みを語り始める。そして, 「ねえ, 誰が一番効きそうだと思う? 誰のところへ行ったらいいか教えてちょうだい」と頼まれることになる。役に立つ呪文をちょっと教えてくれないかと言われることも少なくない。また呪術を行う者にインタビューをしようとするれば, 「呪術を悪いことに使うんじゃないでしょうね?」と念を押され, 司祭からは「あなたはいつか, 悪魔に憑かれて気が狂うだろう」と言われる。要するに, 私が調査をするのは純粋に研究目的であること——すなわち, あくまで文化研究であって, それが本当に効くか効かないかというこ

とには興味を持っていないこと、ましてや自らが実用に使うためではないこと——がすんなり理解されることはむしろ少ないのである。

こんな状況の中で、学術的な研究成果は印刷物として、あるいはラジオやテレビの電波に乗って、どんな僻地の村にも入り込んでいく。研究者の語る言葉は、ある種の権威をもった情報として人々に受け止められる。これを象徴的に表すのが、共同調査者イリイチから聞いた話である。

ある村に行って、ばあさんをつかまえてインタビューを始めたんだ。「悪魔ってのはどういう奴ですかね」って尋ねると、ばあさんは「悪魔ってのは尻尾があって、ずる賢いやつで、ああでこうで・・・」ってスラスラしゃべりだした。でもどうも変なんだ。どうも、どこかで聞いたことがある気がして。それで、「それは誰から聞いたんですか？」って訊いてみたんだ。そしたら、「ラジオだよ。偉い先生が言ってたんだから間違いないさ」って。そこで初めて、その「先生」ってのが自分のことだって気づいたんだよ。ラジオでそんな話をしたからね。自分で自分の話を採集してしまったんだ。大笑いさ。こういうことは1回だけじゃなくて、何度もあった。でも、あのばあさんはすごかったな。一字一句、私の言った通りに繰り返したんだから。

マスメディアを通して広められる学術資料の浸透度は、フィールドで自らの研究成果に再びめぐり合うほど激しい。「失われかけている民族の遺産」として研究成果を一般の人々の手に還元しようとすればするほど、この奇妙な循環は加速していくのである。人類学者以上に当該社会に共有されていた知識を知るものはないという話は、人類学者の世界でよく聞かれるが（渡邊 1990: 234）、長年カレリア各地を調査してきたイリイチもやはり、誰よりも多くの呪文を知っている。自身の研究成果を様々なメディアを通じて発表し続ける彼は、今では「カレリア一有名な呪術師」と呼ばれている。そのため、浮気した夫を取り戻すため、病気を治すために彼に相談したがる人は、少なくないのである。

6 結論

本稿では、現代ロシアにおける呪術ブームが民族学・フォークロアの研究活動といかなる関係性を持っているのかについて論じた。

研究者たちは19世紀以降、「伝統」の保存を目指して多くの資料をフィールド調査によって収集してきた。彼らはその調査活動及び研究成果の出版活動を通じて、本来個人的な所有物であった呪術知識を「民族の文化遺産」として構築しなおした。ソビエト政権の崩壊後、呪術に関する書籍の出版も自由になったが、その際に研究者が構築してきた概念枠組みを利用して研究資料を実用の文脈に移植したのが、近年登場したマスメディ

ア呪術師であった。彼らはソビエト政権による迫害で死滅の危機に瀕する「民族の遺産」として多数の呪文を印刷し、実生活における利用を呼びかけた。研究者はこれらを「偽フォークロア書」と非難するが、多くの人々によって効力を持つテキストとして扱われる中で、フォークロア化しつつある。

「伝統」の保護者を自認する研究者たちは「本物の伝統」を次世代に伝えていくために、現在、学術的な手法に基づく研究成果の発表に努めている。しかし「伝統」喪失のパラダイムが広く共有されているがゆえに、「伝統」の権威を持つ学術的な記述は、呪術の「効力」を保証するものとして利用されてしまう。現代ロシアにおける呪術ブームは、こうした呪術研究と呪術実践の相互作用によって生成しているのである。

謝 辞

本稿執筆にあたっては、高倉浩樹氏から有益なアドバイスをいただいた。また調査地ではヴォドロゼロ国立公園の職員をはじめ、多くの方々に協力していただいた。ここに記して感謝の意を表する。

注

- 1) ロシア語の *magiia*, *koldovstvo*, *znakharstvo*, *tselitel'stvo*, *vedovstvo*, *chary* などを便宜的に「呪術」と訳す。これらをよく知り実践する者については「呪術師」とする。
- 2) 実践呪術書について詳しくは藤原 (2004a) を参照のこと。
- 3) 詳しくは (岩竹 1996) を参照のこと。
- 4) 共同調査の概要については Loginov (2004) を参照のこと。
- 5) 原文では N・S・ステパーノヴァとあるが、これは「シベリアの呪術師」として名をはせる N・I・ステパーノヴァの誤植と思われる。
- 6) 一例として (SD 1995-; Afanas'ev 1995; Baiburin 1983; Mazalova 2001) など。
- 7) ステパーノヴァについて詳しくは藤原 (2004b) を参照のこと。

文 献

- Afanas'ev, A. N. (Афанасьев, А. Н.)
1995 *Поэтические воззрения славян на природу: в трех томах*. Москва: Современный писатель (初出は1865-1869年).
- Aleksandrov, A. (Александров, А.)
1997 *777 заговоров и заклинаний русского народа*. Москва: Астролокид.
- アンダーソン, В.
1987 『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳, 東京: リプロボート (初出は1983年)。

- Baiburin, A. K. (Байбу́рин, А. К.)
 1983 *Жилище в обрядах и представлениях восточных славян*. Ленинград: Наука.
- 坂内徳明
 1985 「現代ソ連におけるロシア・フォークロア学の動向とその問題点」『社会学研究』23: 129-252。
 1995 「ロシア文化という方法」『一橋論叢』113 (3): 305-321。
- Bednenko, G. (Будненко, Г.)
 2004 *Родовая магия: обычаи и правила*. Санкт-Петербург: Невский проспект.
- Buenok, A. G. (Буенок, А. Г.)
 1998 Заговор: комментарий исполнителя. *Живая старина* 1 (17): 17-18.
- Chernetsov, A. V. (Чернецов, А. В.)
 2004 Откровения Натальи Ивановны. *Живая старина* 2: 54-56.
- Dal', V. I. (Даль, В. И.)
 1994 *Толковый словарь живого великорусского языка*. Москва: Прогресс; Универс (初出は1903-1909年).
- 藤原潤子
 2003 「ロシア・カレリア地方に生きる一女性の人生と呪術——ナターシャ・クルチーニナの不幸をめぐる民族誌資料」『東北アジア研究』7: 33-69。
 2004a 「現代ロシアにおける呪術の媒体とその機能——活字化された呪術書をめぐる今日的状況」『説話・伝承学』12: 149-165。
 2004b 「『シベリアの呪術師』への相談から見た現代ロシアの社会問題」『ユーラシア研究』30: 8-13。
- Grigor'eva, G. G. (Григорьева, Г. Г.)
 2000 Стоит ли собирать фольклор? *Живая старина* 2 (26): 39-41.
- 廣岡正久
 2000 『ロシア・ナショナリズムの政治文化——「双頭の鷲」とイコン』東京: 創文社。
- Hirsch, F.
 1997 The Soviet Union as a Work-in-progress: Ethnographers and the Category Nationality in the 1926, 1937, and 1939 Censuses. *Slavic Review* 56 (2): 251-278.
- ホブズボウム, E.・T. レンジャー編
 1992 『創られた伝統』前川啓治他訳, 東京: 紀伊国屋書店 (初出は1983年)。
- 岩竹美加子
 1996 「はじめに」岩竹美加子編訳『民俗学の政治性——アメリカ民俗学100年目の省察から』pp. 9-61, 東京: 未来社。
- Kliaus, V. L. (Кляус, В. Л.)
 1999 Публикации русских заговоров 1997-1998 гг. *Живая старина* 1 (21): 54-55.
- Krasnov, I. (Краснов, И.)
 2003 *Наузы: славянские обереги*. Санкт-Петербург: Невский проспект.
- Kurets, T. S. (Курец, Т. С.)
 2000 *Русские заговоры Карелии*. Петрозаводск: Изд. Петрозаводского университета.
- Loginov, K. K. (Логинов, К. К.)
 2004 О современных «магических специалистах» Карелии и архангельской области.

- Живая старина* 2: 13–16.
- Maikov, L. N. (Майков, Л. Н.)
1869 *Великорусския заклинания. Записки Императорского русского географического общества по отделению этнографии* 2. Санкт-Петербург.
- Mazalova, N. E. (Мазалова, Н. Е.)
2001 *Состав человеческий: человек в традиционных соматических представлениях русских*. Санкт-Петербург: Петербургское востоковедение.
- Miller, F. J.
1990 *Folklore for Stalin: Russian Folklore and Pseudofolklore of the Stalin Era*. Armonk, N.Y.: M. E. Sharpe.
- Nikitina, S. E. (Никитина, С. Е.)
1996 О колдунах, «словах» и судьбах. *Живая старина* 1 (9): 52–53.
- Novonbergskii, N. Ia. (Новонбергский, Н. Я.)
1907 *Врачебное строение в до-Петровской Руси*. Томск.
- Porov, G. (Попов, Г.)
1903 *Русская народно-бытовая медицина по материалам Этнографического бюро князя В. Н. Тенишева*. Санкт-Петербург: Тип. А. С. Суворина.
- Poznanskii, N. (Познанский, Н.)
1995 *Заговоры : опыт исследования происхождения и развития заговорных формул*. Москва: Индрик (初出は1917年).
- Ryan, W. F.
1999 *The Bathhouse at Midnight: An Historical Survey of Magic and Divination in Russia*. Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press.
- Sakharov, I. P. (Сахаров, И. П.)
1885 *Сказания русского народа собранные И. П. Сахаровым*. Санкт-Петербург.
- SD (*Славянские древности*)
1995 Толстой Н. И. (Отв. ред.) *Славянские древности: этнолингвистический словарь: в пяти томах*. Москва: Международные отношения.
- Sokolov, Iu. M. (Соколов, Ю. М.)
1931 Дискуссия о значении фольклора и фольклористики в реконструктивный период. *Литература и марксизм* 5: 91–96. Москва.
- Stepanova, N. I. (Степанова, Н. И.)
1996 *Заговоры сибирской целительницы* 1. Москва: Рипол классик.
- Vinogradov, N. N. (Виноградов, Н. Н.)
1907 Заговоры, обереги, спасительные молитвы и проч. *Живая старина* 1: 1–24; 2: 25–56; 3: 57–80; 4: 81–102. Санкт-Петербург.
1908 Заговоры, обереги, спасительные молитвы и проч. *Живая старина* 1: 1–24; 2: 25–40; 3: 41–64; 4: 65–94. Санкт-Петербург.
1909 Заговоры, обереги, спасительные молитвы и проч. *Живая старина* 4: 1–29. Санкт-Петербург.
- Vinogradova, L. N. (Виноградова, Л. Н.)
1994 Путь в науке от «серебряного века» фольклористики до эпохи «великих

преобразований». In Е. Н. Елеонская (ред.) *Сказка, заговор и колдовство в России. Сб. Трудов*, pp. 7-20. Москва: Индрик.

Zabylin, M. (Забьлин, М.)

1990 *Русский народ: обычаи, обряды, предания и поэзия*. Москва: Книга принтшоп (初出は1880年).

Samarin, Iu. (Самарин, Ю.)

1931 У московских фольклористов: отчёт о работе фольклорного кабинета с 1928 по 1931 г. (хроника). *Советская этнография* 3 (4): 234-239.

渡邊欣雄

1990 『民俗知識論の課題——沖縄の知識人類学』東京：凱風社。

